

福田貝塚（岡山県倉敷市）の縄文土器

—岡山理科大学博物館学芸員課程所蔵コレクションについて（2）—

小林博昭・徳澤啓一・酒井雅代*

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科

*鳥取県八頭郡智頭町教育委員会生涯学習部社会教育課

(2006年10月2日受付、2006年11月6日受理)

1. 今回の紹介資料について

福田貝塚は、倉敷市福田町福田に所在し、「福田貝塚」あるいは「福田古城貝塚」、「古城貝塚」と称され、1965年3月25日、倉敷市指定の史跡となり、現状のとおりとなっている（写真2・3）。

本遺跡では、1950年及び1951年の2回にわたって、発掘調査が実施され、縄文時代前期から晩期にかけての出土遺物が見られたという（鎌木1986）。貝層そのものからは、中津式（福田K1式）土器・福田K2式土器・福田K3式土器が検出され、縄文時代後期前葉の貝塚であったことが明らかにされている（鎌木・木村1956）。

1回目の発掘調査（以下「第1次調査」という）は、「山内清男・鎌木義昌が主体」（鎌木1986）となっており、1950年9月27日から10月3日にかけて実施されたようであり（泉1989）、また、2回目の発掘調査（以下「第2次調査」という）は、1951年、「鎌木が発掘責任者として作業が行なわれた」（鎌木1986）ようである。

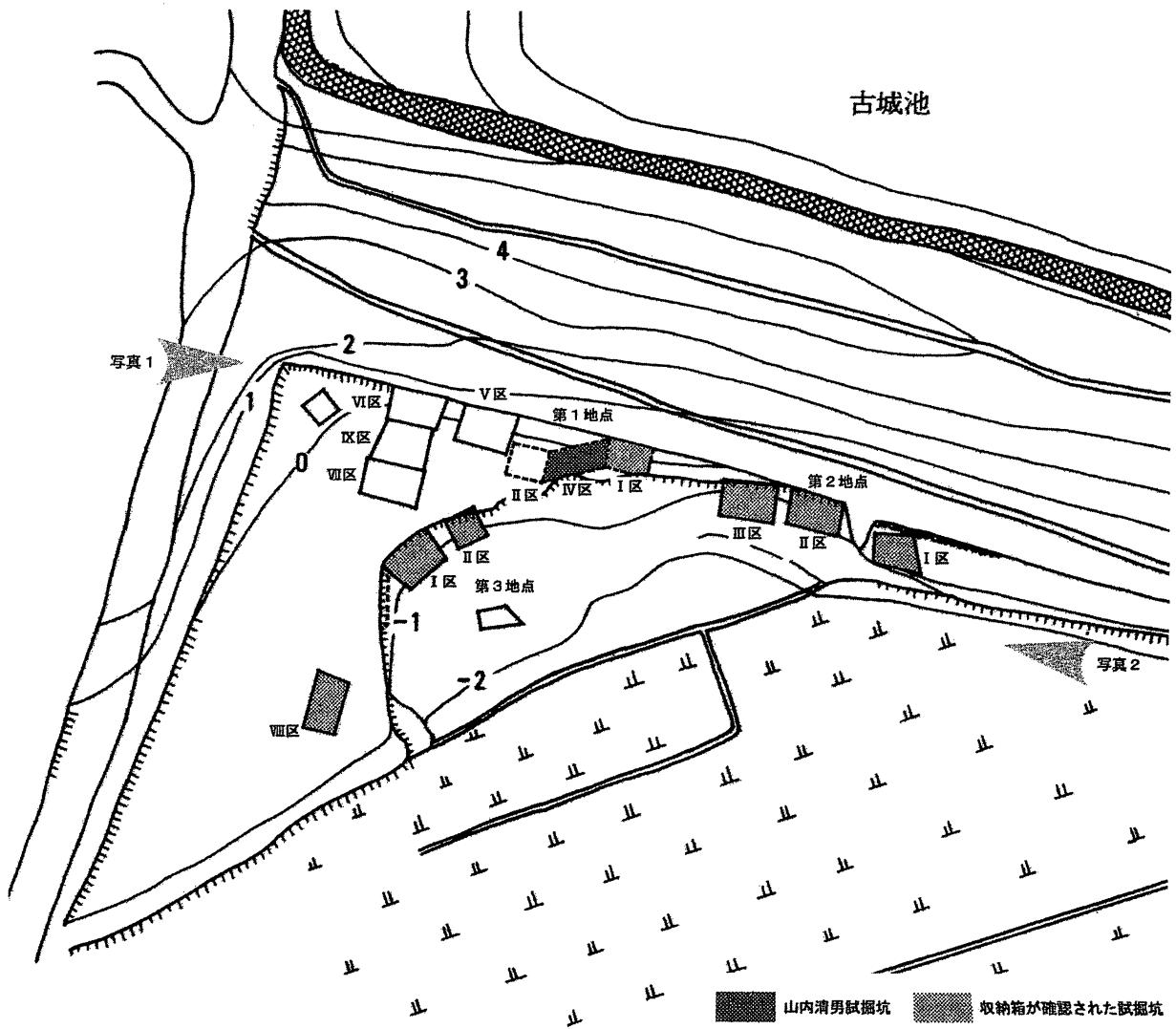
第1次調査及び第2次調査では、3m×2mの試掘坑を15カ所掘削し、概算90㎡の発掘調査をしたことになる。

このうち、第1地点IV区の試掘坑は、「山内博士の調査地区」であり、「同年に調査した鎌木氏の第1地点I区試掘坑とII区試掘坑とを斜めにつなぐように設定した範囲であった」（泉1989）。そのため、第1地点IV区の出土遺物は、「山内清男考古資料」（以下「山内資料」という）として、現在、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所（奈良市）が所蔵している。

第1次調査及び第2次調査の出土遺物は、鎌木義昌が所蔵し、本学博物館学芸員課程に引き継がれている（以下「鎌木資料」という）。ただし、2回の調査では、高橋護、間壁忠彦、間壁葎子の方々が参加されており（泉1989）、岡山県立博物館（岡山市）や財団法人倉敷考古館（岡山県倉敷市）において、出土遺物の一部が見られるとおり（岡山県立博物館1998）。本遺跡の出土遺物（以下「福田貝塚資料」という）は、現在、それぞれ散在した状態で所蔵されている。



写真1 福田貝塚資料（鎌木資料）の収納状態



第1図 福田貝塚のトレンチ配置図 (1/100) (鎌木1986・泉1989 抜粋一部改変)

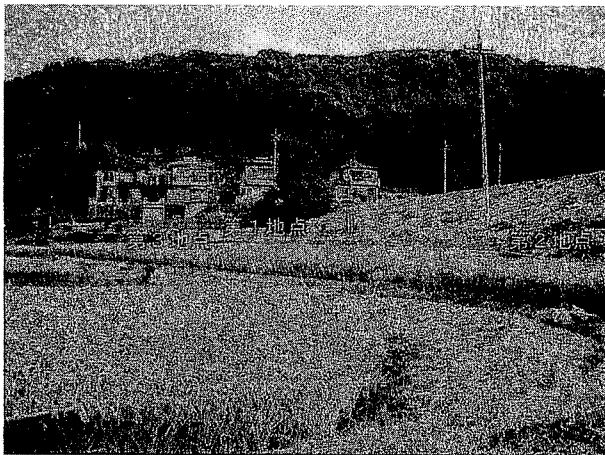


写真2 福田貝塚の現状とトレンチ配置図の対比① (2006年9月30日撮影)

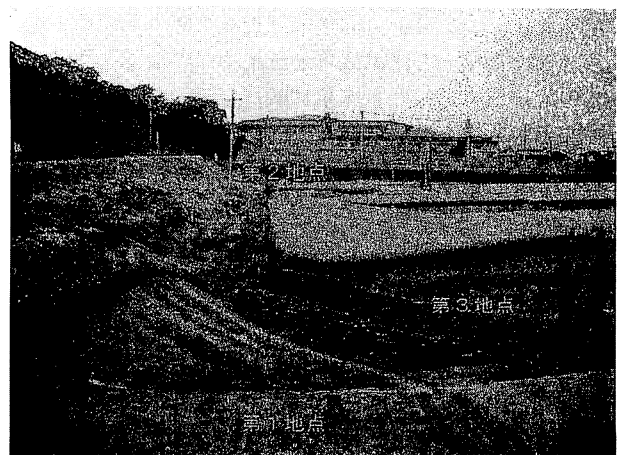


写真3 福田貝塚の現状とトレンチ配置図の対比② (2006年9月30日撮影)

の紹介資料と同じように、平箱内の出土遺物は、塵芥等で著しく汚濁していた。そのため、当時の注記をラッカーで保護しながら、入念な再洗浄作業を行った。

そして、出土分布区分にあわせて、木製木箱からテン箱に整理し直すことにした。統合されたあるいは細分された出土分布区分もあるが、少なくとも、52単位に整理されていたことが明らかとなった(第1表)。

見出し及び添え書きは、地点・地区・層位を記載内容とする「■地区_第■区_第■層」(以下、■は記入欄、_は空白の表記とする)と印刷された用紙が使用され、出土分布区分単位で同梱されていた。

また、注記は、見出し及び添え書きと合致した記載内容が筆書きされていた。地点・地区・層位に対して、原則、ローマ数字・アラビア数字・アルファベットが充てられ、組み合わせの表記が採用されていた。「第2地点_第Ⅲ区_B2層」であれば、「Ⅱ_3_B2」と表記されていた。しかしながら、見出し及び添え書きは、地区の表記としてローマ数字が採用されていた。そのため、注記の地点と地区の記載内容については、本来、「Ⅱ_3_B2」と表記しなければならないが、ローマ数字とアラビア数字を混交して、「Ⅱ_Ⅲ_B2」と表記されている注記も少なからず見られた。

さらに、地点・地区・層位のうち、記載内容のいくつかが漏れていた。ローマ数字・アラビア数字・アルファベットの組み合わせという表記が遵守されているとすれば、第1表の「地点不明」とした木箱の一群は、地点の表記が抜け落ちていることになる。ただし、「地点不明」の「Ⅱ区」が「第2地点」、「Ⅲ区」が「第3地点」という可能性も捨てきれない。

「地点不明」とした出土分布区分の単位は、平箱や注記の記載内容が不十分であるものの、聞き書きなどから地点候補を絞り込むことができそうである。「地点不明」の「Ⅲ区」は、「鎌木氏らによると、地点によって若干の時期差があり、前期の磯ノ森式及びそれ以前の土器が多く出土するのは、第1地点Ⅲ区及び第3地点とのことであり」(泉1989)という聞き書きがあるとおり、縄文時代前期の出土遺物が見られる「最下層」を「青色粘質砂層」にあてることで、「第1地点Ⅲ区」とできそうである。また、「地点不明」の「Ⅱ区」も、「山内博士の調査地区は、同年に調査した鎌木氏の第1地点Ⅰ区試掘坑とⅡ区試掘坑とを斜めにつなぐように設定した範囲であった」(泉1989)という記述があり、「Ⅳ区」の出土遺物が少なくないことから、隣接する「第1地点Ⅱ区」から出土遺物が皆無ということはなかったと考えられる(第1図)。

今後、発掘調査における図面等と照らし合わせることでできれば、解消されるであろうが、まずは、現時点で判明している出土分布区分を整理しておきたい。

3 縄文時代後期土器について

資料1(第2図1)

注記は「Ⅱ_3_B3」と表記され、「第2地点Ⅲ区B3層」が出土分布区分である。

資料1は、口縁部が5単位の波状を呈する浅鉢で、「中津式土器」である。波頂部に3単位の刻目が施され、底部まで縄文帯が垂下される。口縁部と底部に縄文帯を横位に1周させ、波頂部下に縦位の縄文帯を垂下させて、文様を分割する。空白部は、口縁部から下方に沈線で肥大した銚先状として、底部から上方にスベード形として、それぞれ施文区画する。区画内は、単節縄文RLが施される。外面の文様の見えない部分は磨り消される。内面も強い研磨が施される。

口径24.0cm、器高6.4cm、底径6.0cmを測る。5単位の波状のうち2単位は残存している。色調は、外面が灰黄色(2.5Y 7/2)、内面が褐灰色(10YR 5/1)、断面が黒色(5Y 2/1)を呈する。胎土は、1~2mm程度の長石、赤色粒子を多量に含む。やや粗い。焼成は良好である。

資料2(第2図2)

注記は「Ⅱ_3_B2」と表記され、「第2地点Ⅱ区B2層」が出土分布区分である。資料1と資料2は、「第2地点Ⅲ区」から出土し、「B2層」と「B3層」という位置関係にある。器形や刻目などの特徴からすると、同時期の所産と見做せそうである。

資料2は、平縁の深鉢で、頸部がかかるく屈曲し、胴部が張る。口唇部は、角端に面取りされ、連続する刻目を施す。刻目は、細く直刻に施され、密な間隔である。内外面は、横方向の粗いナデが施される。ナデ調整は、工具による擦痕が残る。

口径25.5cm、残存器高15.4cmを測る。色調は、外面がにぶい褐色(7.5YR 5/4)、内面がにぶい黄褐色(10YR 5/3)を呈する。胎土は、3~5mmの砂粒を含む。粗い。焼成は良好である。

資料3(第2図3)

注記は「Ⅱ_Ⅲ_B2」と表記され、「第2地点Ⅲ区B2層」が出土分布区分である。

資料3は、平縁の皿形浅鉢である。無文である。内外面を強く研磨する。なお、口縁部と底部の破片が接合しないものの、同一個体と判断した。

色調は、外面が明褐色(7.5YR 4/6)、内面は褐色(7.5YR 4/6)、断面は褐灰色(10YR 4/1)を呈する。胎土は、2~5mm程度の長石・石英を含む。やや粗い。焼成は良好である。

資料4(第2図4)

注記は「Ⅱ_E_I」と表記され、組み合わせからすれば、「E_I」を「E1層」とすることができる。しかしながら、「Ⅱ」の表記は、地点と地区のどちらを指し

示すのか判然としない。ただし、「Ⅱ区E1層」とすると、平箱が存在する出土分布区分が「第1地点」しか見当たらないので、取り敢えず、「第1地点Ⅱ区E1層」と結論しておきたい。

資料4は、口縁部が開く植木鉢形の鉢で、本遺跡が標識とされる「福田K2式土器」である。口縁部が平縁で、口縁端部が拡張、肥厚し、3本1単位の刻目が施される。胴部は、同じ3本1単位の沈線が縦位に伸びて、縄文帯が磨り消される。縄文は、単節縄文RLである。一部、入り組み状に施文される。外面の文様の見えない部分は、強い研磨が施される。内面も強い研磨が施される。

口径31.8cm、残存器高17.7cmを測る。底部付近まで残存している。色調は、外面がにぶい黄橙色(10YR 7/4)、内面がにぶい黄橙色(10YR 6/3)を呈する。胎土は2mm程度の長石を含む。やや粗い。焼成は良好である。

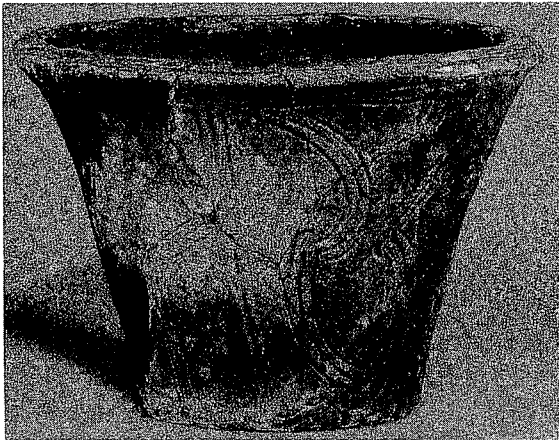


写真4 資料4の復元・彩色処理（分解洗浄前）

4 「鎌木資料」の今後について

福田貝塚は、備讃瀬戸内地域における縄文時代後期前葉の土器編年の標識遺跡である。山内清男は、出土層位にあわせて、「福田K1式～K3式土器」の型式序列を提示した(山内1937)。また、鎌木義昌は、便宜的としながらも、「鎌木資料」をもとに、「福田C式土器」を設定した経緯がある(鎌木・木村1956)。

しかしながら、「鎌木資料」のほとんどが公表されていないことから、山内編年と「福田C式土器」の関係も整理されていない。また、4個体の縄文土器は、「山内資料」の中で、同じような器形、そして、文様構成をもつ資料が見られる。隣接するトレンチから取り上げられ、当然、同一個体が存在することも考えられる。

「福田貝塚資料」全体の精査が済んでいないため、福田貝塚の位置づけも棚上げされている(間壁1980)。

今回、分解洗浄に伴って、縄文時代後期前葉の4個体の実測図及び拓影を作成した。あわせて、同一個体

の破片資料を見出すため、「鎌木資料」が半世紀にわたって封印されていた平箱を解梱した。そして、平箱の見出し及び添え書き、注記された内容を手がかりとして、「山内資料」にある層位図にあわせて、第1表のとおり、「山内資料」と「鎌木資料」の出土分布区分の照合を試行した。

今後、できれば、分散した「福田貝塚資料」をあわせて、実物資料の整理作業を行いたい。また、「鎌木資料」の図面や写真等を見出して、層位や出土分布をはじめとする発掘調査の記録を整理する必要がある。

謝 辞

「鎌木資料」の開梱及び収納状態の記録作業、出土遺物の分解洗浄作業は、2004年度後期、本学博物館学芸員課程の博物館(人文系)実習の履修生が実施した。

また、本稿の作成にあたって、下記の皆様よりご指導・ご教示を賜った。厚くお礼申し上げる次第である。

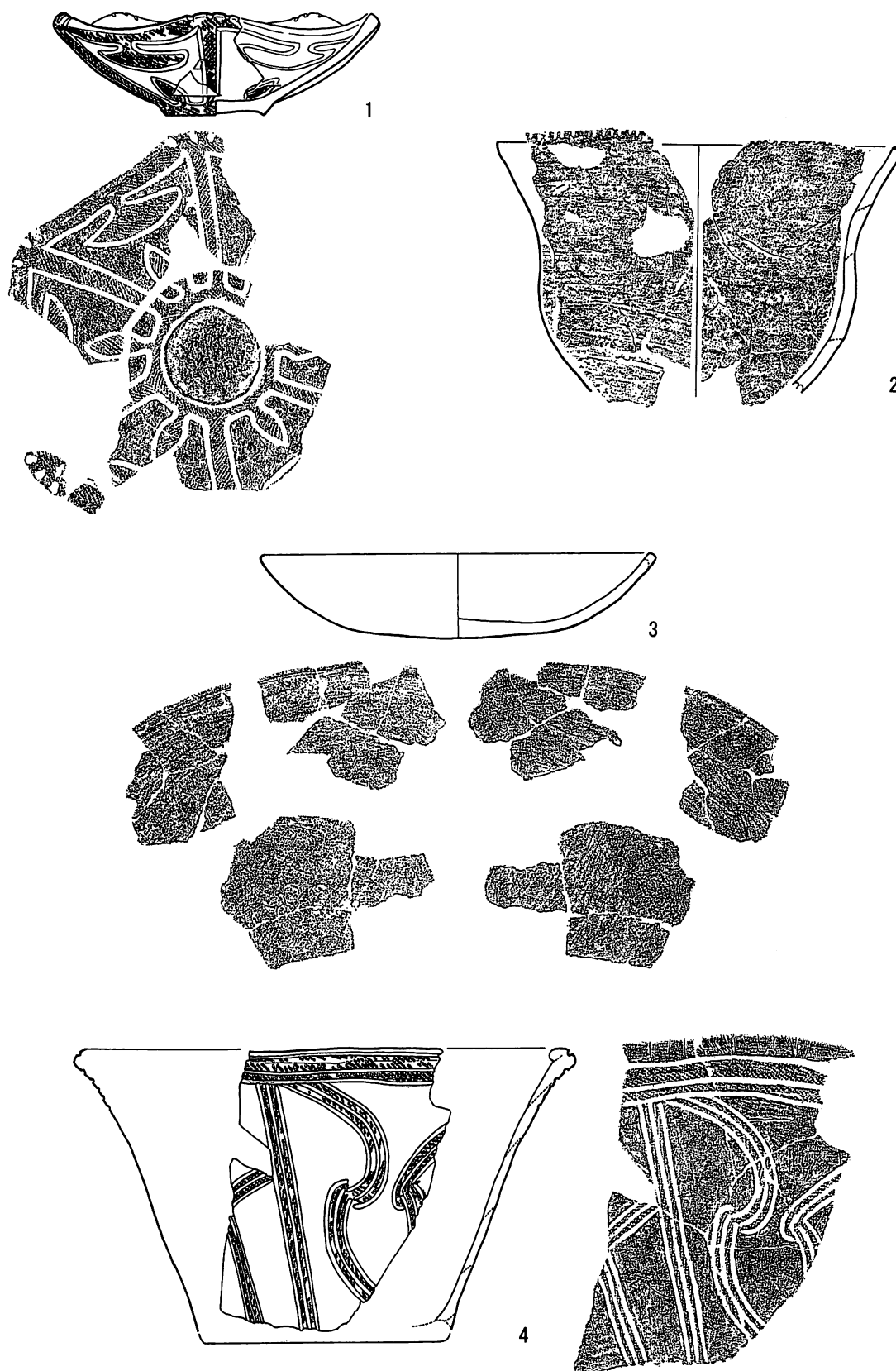
鎌木英子 高橋 護 間壁忠彦 間壁菫子 柳瀬昭彦
佐藤寛介 木田 真 亀田修一 白石 純 富岡直人
岡山県立博物館 財団法人倉敷考古館

参考文献

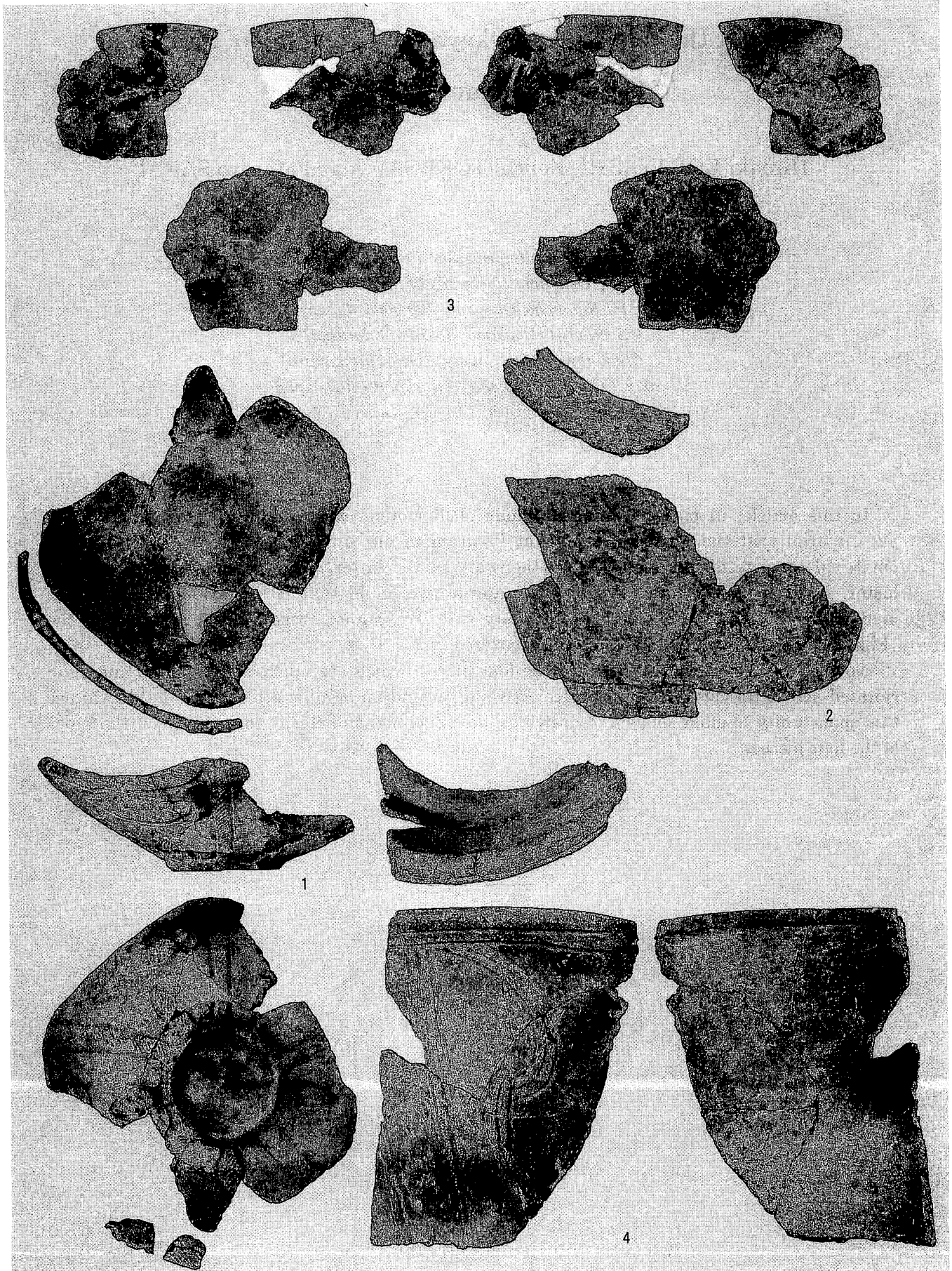
- 水原岩太郎 1935 『岡山県浅口郡黒崎村中津貝塚発見縄紋土器模様』
鎌木義昌・木村幹夫 1956 「Ⅲ 各地域の縄文式土器～中国～」『日本考古学講座』第3巻(縄文文化) 河出書房 188～201頁
鎌木義昌・高橋 護 1965 「9 瀬戸内(縄文文化の発展と地域性)」『日本の考古学』Ⅱ(縄文時代) 河出書房 230～249頁
池葉須藤樹 1971 『岡山県児島郡灘崎町彦崎貝塚調査報告』
間壁忠彦 1980 「縄文後期彦崎KⅡ(竹原)式土器をめぐって」『倉敷考古館研究集報』第15号 倉敷考古館 76～89頁
鎌木義昌 1986 「17 福田古城貝塚」『岡山県史』第18巻(考古資料) 岡山県 43～46頁
泉拓良・松井章 1989 『福田貝塚資料～山内清男考古資料2～』(奈良国立文化財研究所史料第32冊) 奈良国立文化財研究所
鎌木義昌 1992 「第2章 縄文時代」『岡山県史』第2巻(原始・古代Ⅰ) 岡山県 56～102頁
佐藤寛介 2004 「倉敷市中津貝塚出土の縄文土器」『研究報告』23・24号 岡山県立博物館 1～29頁

附 記

本稿入稿後、平成18年10月11日、鎌木英子様宅を訪問し、「鎌木資料」の図面及び写真等を拝見することができた。ほとんどの資料が腐朽しており、保全のための早急な手立てを講じたいと考えている。



第2図 福田貝塚 遺物実測図 (1/4)



福田貝塚

Jomon Ware of the FUKUDA Shell Mound
—About the collection of Okayama University of Science,
Museum Attendant Program (2)—

Hiroaki KOBAYASHI, Keiichi TOKUSAWA and Masayo SAKAI*

*Department of Socio-Information, Faculty of Informatics,
Okayama University of Science
1-1 Ridai-cho, Okayama 700-0005, Japan
*Section of Education, Board of Education,
Chizu town, Yazu County, Tottori prefecture
2072-1, Chizu, Chizu-cho, Tottori 689-1402, Japan
(Received October 2, 2006; accepted November 6, 2006)*

In this article, in material of the Fukuda shell mound, we introduce a part of the Kamaki material that the Museum Attendant Program in our university possesses. The Kamaki material consists of four pieces of earthenware in the latter Jomon period restored with plaster. Looking closely into the Kamaki material, we found that it is only material of fragments and "Fukuda K2 earthenware" is very rare. We cannot erase the impression that the Fukuda shell mound is dispersed and scattered.

Now, we disassembled and washed the four pieces, which are much contaminated and deteriorated across the ages, with a surface-active agent and an organic solvent. We decided to use this opportunity to make measured drawings, do a rubbing, and clarify contents about the types of the four pieces.